



南部俵積み踊り

庭田植え 俵運び再現

雷鳴放射

蝦夷の餅文化 試食

恵方巻きづくり

餅つき体験

鬼っこわんぱく講座鬼剣舞発表

親子鬼そり競争

木ボラの邪気祓い儀式

北上市立 第36号 鬼の館だより

見て、食べて、遊んで、笑って！イベント多彩の福豆鬼節分会！

鬼の館では年中行事の一つである“節分”を通じて、心和やかで文化の薫る地域づくりと人づくりを目指し、市民参加型の創造性豊かな特色ある事業を展開していくことを目的に「福豆鬼節分会(ふくまめおにせつぶんえ)」を毎年開催しています。

今年は実行委員会(岩崎地区青年会虹色の会“絆”、岩崎地区交流センター、鬼の館)が立ちあげられ、正午から午後5時までの開催とし、恒例の福豆・餅まき行事、芸能公演、ゲーム、習俗儀礼の行事などに色々なイベントを楽しんでもらいました。

今回特にも盛り上ったのは「みんなで作ろうエッ!?ホ〜♪(恵方)巻き」という、オニ(02)にちなみ20メートルの長い太巻き作りに挑戦しようという企画。約50人の参加希望者がテーブルの前に並び、玉子、かんぴょう、カニカマなどの具材を順々に乗せ終わると「いち、にの、さーん」の掛け声に合わせて一斉に巻かれていきました。出来上がった太巻きをみんなの手で持ち上げ、無事に完成されたことが確認されると「ワァ〜!!」という喜びの歓声が上がリ、大きな拍手が湧き上がりました。その後は恵方巻きを来場者一人一人に配り、全員で“北北西”(今年の恵方)を向き、幸運を願いながら丸かぶりするという大成功の催しに終えることができました。

昨年から続く習俗再現の庭田植え行事にも、今回女性陣による“南部俵積み踊り”が加え舞われ、その中、俵を運ぶ馬や作付けをする農耕の様子が表現され、今年一年の豊作を祈願する儀式が行われました。

今年の来場者は約1800人。今年もたくさんの来場者が訪れ、色々なイベントを通し一年に溜められた心の中の邪気(やましい心)が祓い清められたことでしょう。

2011 鬼の館 下半期

～こんなことがありました～

特別展 親子で楽しむ仮面の世界 9/23(金)～11/26(土)

鬼の館では国内外の様々な仮面を収蔵していますが今回は「親子で仮面の世界に触れ、親しんでもらう」ことを目的に、仮面が意味するものをさまざまな角度から分類し、多様性を紹介するものとなりました。

展示資料数は約60点。「仮面は何を表現しているのかな・～どう使うのかな・何でできているのかな・四季・世界各地の仮面の分布・仮面の力」の6つの項目に視点を据え、習俗儀礼に使用される荒神面、ヤシの実のできたお面、お祭り屋台で売られる人気キャラクターのセルロイドのお面などあらゆるお面を展示し、仮面が繰り広げる世界を堪能していただきました。また期間中にはワークショップ「親子で楽しむ仮面作り」の2回講座を開催し、紙型のお面に毛糸や色紙などの身近な素材で作るお面作りにチャレンジしてもらいました。参加者の中には親子組に限らずおじいちゃんおばあちゃんを連れた家族組も参加され、家族みんなで楽しむワークショップとなりました。



一緒に作ると楽しいね♪ できたよ!



ヤシの実面



憧れのヒーロー「アラレちゃん」や「ドラえもん」のセルロイド面

ワークショップ「親子で楽しむ仮面作り」の2回講座を開催し、紙型のお面に毛糸や色紙などの身近な素材で作るお面作りにチャレンジしてもらいました。参加者の中には親子組に限らずおじいちゃんおばあちゃんを連れた家族組も参加され、家族みんなで楽しむワークショップとなりました。

特別展 よろず伝承展 ～鬼と節供人形～ 12/17(土)～3/11(日)

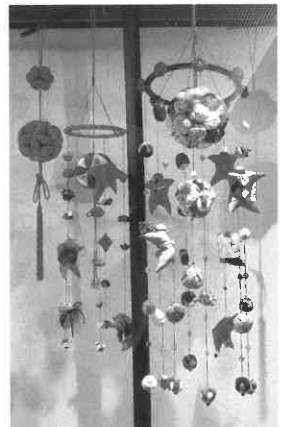
節供とは「季節の節目に神さまにお供え物をして祝う日」であり、三月三日は婦女子の祝い日、五月五日は男児の成長を念じる日とし、それぞれ季節の節目に身のけがれを祓う大切な行事として伝承されてきました。当館では市民の皆さんからのご協力をいただき、手作りの雛人形や愛玩の人形などを集め、鬼と関連した様々な節供人形を紹介しました。



左：花巻人形「熊乗り金太郎」
右：桃太郎鬼退治人形

最近では、七段飾りの雛人形やカブトの飾り物が定番となっていますが、かつての節供人形は「強い子どもに育つよう」と熊に乗る金太郎や鬼退治をする桃太郎などの御伽草子の主人公や歴史上で一躍した人物が表現されており、子どもの健康を祈念するものとして飾られていました。

様々な願いが込められ飾られた昔ながらの節供人形たちを、より深くご鑑賞いただけたのではないのでしょうか。



華やかな手作りのつるし雛

ワークショップ ～冬休み工作大作戦～ 12/25(日)～1/13(金)

鬼の館では、工作を通して鬼に触れてもらおうと小学生の夏・冬休みの期間を利用したワークショップを行っています。今回は、LED妖怪ランプ、鬼(キ)ッズチェア、はりこのお面づくりの3つに挑戦してもらいました。当館では鬼や妖怪をテーマとしたワークショップを開催しています。今までワークショップで作られた作品は、ロビーに展示していますのでお立ち寄りの際はお気軽にご覧ください。



〈鬼(キ)ッズチェア〉



〈はりこのお面づくり〉



〈LED妖怪ランプ〉

鬼っこわんぱく講座 鬼剣舞体験 ～鬼剣舞にチャレンジ～ 1/8(日)～2/5(日)



新年早々に始まる鬼剣舞体験。毎週日曜の午後になると「ハァッ!!」という元気な子ども達の掛け声が館内に響きわたります。今年も福豆鬼節分会の発表に向けてお面づくりや、岩崎鬼剣舞保存会さんから指導をいただきながら「刀剣舞の狂い」踊りの練習に汗を流しました。今回の参加者は市内の4歳児から小学6年生の計18名が集まり、毎年参加しているベテランの子は初めて試みる子に教え合うなど一生懸命練習に取り組んでいました。当日は天候にも恵まれ、元気よく踊りを披露することができました。

謝辞 黒沢尻東小学校5年 照井 百音

岩崎鬼剣舞保存会の方々や鬼の館スタッフの皆さんのおかげで、伝統ある「鬼剣舞」を憧れの装束を着て舞うことができ、本当にうれしい思い出となりました。舞に使う面も自分たちで手作り体験しながら、面の色にも様々な意味があることなどを知ることができました。遥か昔から受け継がれてきたすばらしい伝統芸能「鬼剣舞」を、これからもいろいろと研究し、学びながらこの北上に生まれたことで鬼とつながり、誇りとしていきたいと思っております。いろいろと教えてくださった岩崎鬼剣舞の先生方、鬼の館のスタッフの皆さん、毎回練習に連れて来てくれたお父さん、お母さん、ありがとうございました。





鬼学講座 ～鬼の源流を求めてパート15～ 11/3(木)～2/12(日)

今年度の講座は「仮面の精神儀礼」をサブテーマとし、11月～2月まで5回にわたり開催しました。

市内や奥州市、一関市などから受講生計34名が参加し、宗教儀礼や芸能など世界で広く活用、継承されている仮面の文化について、5名の講師による様々な観点から追及し、学ぶ運びとなりました。

講師の方々：第1回 鈴木明美氏(元鬼の館学芸員)・第2回 相原康二氏(えさし郷土文化館館長)・第3回 菅原夢玄氏(能面師)
第4回 熊谷保氏(元北上市文化財保護審議会委員)・第5回 斎藤壽胤氏(秋田県民俗学会副会長・鶴ヶ崎神社宮司)

～平成24年度インフォメーション～

●企画展・特別展

特別展「収蔵資料展～妖怪古今東西～」

4月21日(土)～7月22日(日)

企画展「魔よけ」

8月11日(土)～11月11日(日)

特別展「よろず伝承展～鬼と呼ばれたモノたち」

12月15日(土)～3月10日(日)

●こどもの日わくわくイベント 5月5日(土)

●第18回大乘神楽大会 6月10日(日)

●わんぱく講座 5月～2月

●鬼学講座 10月～1月(5回講座)

●福豆鬼節分会 平成25年2月3日(日) 予定

●芸能公演 午後1時30分から

4月22日(日) 北藤根鬼剣舞

5月3日(木) 黒岩鬼剣舞

5月4日(金) 二子鬼剣舞

5月27日(日) 御免町鬼剣舞

6月3日(日) 相去鬼剣舞

6月24日(日) 滑田鬼剣舞

7月22日(日) 鬼柳鬼剣舞

8月14日(火) 岩崎鬼剣舞

8月26日(日) 口内鬼剣舞

9月23日(日) 谷地鬼剣舞

10月7日(日) 鬼柳鬼剣舞め組

10月28日(日) 相去鬼剣舞

出前講座 和紙面作り講座

☆全行程→お面の型抜きから色ぬりまで。

料金：300円 所要時間：3～5時間

★色ぬりのみ→出来上がったお面に色ぬり

料金：650円 所要時間：1～2時間

お面作りは、子ども会、学校の授業、ふれあいデイサービスなどでご利用いただいています。鬼剣舞のお面の意味なども紹介しながら楽しく作っていただけます！

鬼剣舞面



カッパ面

退任によせて “楽しく過ごさせていただいてありがとうございます。感謝・感激”

館長 菊池 清満

このたび3月31日をもって退任することとなりました。

1年間の短い期間ではありましたが地域を始め、各種団体、関係機関の方々及び鬼の館スタッフに支えられながら、楽しく元気に働けたことに深く感謝申し上げます。鬼について全く知識もない私でしたが、鬼剣舞の歴史や、鬼として扱われ、蝦夷として蔑まれ続けて来た、先祖の無念な想いなど知れば知るほど興味が湧いて来て、今後もっともっと勉強したい、しなければという思いで一杯であります。

さて、この間、3.11のあの忌まわしい大震災の影響等では着任早々4月9日まで休館を余儀なくされたことや、旅行等の自粛ムードで大型バスでの団体客が来館しなくなるなど、入館者が大幅に減少し、賑わいのある館づくりを目指している当館にとって、大きな痛手となりました。ただ幸いなことに鬼剣舞公演や、子どもの日わくわくイベント、大乘神楽大会、そして福豆鬼節分会等の行事は、出演団体や関係機関及び当館スタッフ各位の熱意と努力の頑張りにより、駐車場確保が困難な位の嬉しい悲鳴で、何れも例年以上の人出で賑わい大成功裏に終了しましたことについて、大変やりがいがあり、嬉しく満足させられました。

最後のご奉公地で多くの皆様のご指導、ご支援を受け、多くの人達と出迎え、人となりを知りえたことは、私のかけがえのない大きな財産と自信になりました。本当にありがとうございました。

退任に当たり、私の人生観を述べさせていただきます。33歳で和賀町役場にお世話になり、以来人間関係については、常に相手から逃げず(議論好き)に真正面から向き合うことを心掛けてきたことから(自己主張が強すぎるという人が大半)、意見の対立や、衝突等も多くありましたが、これで今の自分があることや理解者との良き人間関係を構築できたことなどから、今後とも納得がいくまで議論し合いながら邁進し、他人の迷惑にならないように心掛けながら、楽しい人生を歩んでまいりたいと考えております。

最後に、この地域は夏油高原温泉郷など四季折々の自然に恵まれた観光拠点で、当館はその玄関口にあることから、観光と一体的な施設として、地域から愛され、地域の更なる発展に寄与し、鬼の精神文化を大事に育み、郷土の宝である鬼剣舞を大事に守り伝え貢献し、地域に必要な大事な拠点施設として、大きく飛躍することを祈念し、退任のご挨拶とさせていただきます。

本当にありがとうございました。



鬼学ノート

仮面考

鬼の館だより34号から3号にわたるお話の“下編”です。

この視点にたつて世界的な仮面の起源をみると最古の仮面習俗は、すでに約二万年前に完成された姿で当時の民族のもとで、執り行われていたこととなる。

また、『仮面』の特徴的な緯度的分布状況については、人類の誕生とともに営まれた「生業」に大きく影響して派生したものとする論考もある。これらは、長い人類の歴史の中で、人はまず食糧を採集して暮らすという「食料採集民」と食糧を生産する暮らし「食糧生産民」、さらに産業社会の中で暮らす「産業社会民」へと移行する過程を人類の社会構造として区分したのち、この移行過程の中に「狩猟民」・「牧畜民」・「農民」の存在を定義づけている。

泉靖一氏は『神像と仮面の民族誌』(1988:岩崎美術社)という出版物において狩猟民や牧畜民は仮面を作らず、農民が仮面を作り出したと論述し、さらに木村重信氏は、「民族芸術の源流を求めて」(1994:NTT出版)の中で、農民と一部の狩猟民とが仮面を作り、牧畜民は仮面を一切作らないとする解釈を論述している。両研究者の論考の相違点は、狩猟民が仮面文化を有していたかどうかの可否について争点となっているが、当該争点に関する別の論考として、「狩猟を生業とする民族は、神像や仮面を本来つくり、民族の希求やイデオロギーを洞窟壁画や岩絵並びに道具に対する彫刻に表現した」と説く現在の民族習俗のありかたから論考を展開する研究者もいる。確かに狩猟民族であるエスキモー族の仮面や北西アメリカのトーテム・ポールの紋章柱、また南アメリカの青年儀式に使用される仮面などの分布状況をみると、現在その習俗は一部に確認されるが、これらを周辺の仮面習俗と比較検討すると一様ではなく、古来から営まれてきた習俗様式とは明らかに異なり、習俗としての呪術的な精神感には含まれず、単なるイデオロギー的な思想のもとに執り行われている風習と見ることができ、周辺地域から新しく伝播した習俗とも解釈できる。これらの論点からすれば、現時点での狩猟民族が古来から仮面を多様していたかどうかについては、さらなる実見調査と研究が必要であるが、本項では狩猟民における仮面習俗については、国内での発見例や「人と生業」という長い人類の歴史的遷り変りの過程の中において、使用されていた仮面の存在の可能性を指摘しておきたい。なぜなら、定住性が求められる「農業」が始まる以前における生活形態での「生業」は、世界的にも狩猟採集などを主体とした生活領域が一般的であったものと考えられ、そこには必然的に個々や共同集合体における糧となる獲物や食料に対する精神信仰が確立されていたものと推察されるためである。

また、牧畜を専業とする民族も仮面を作らなかつたとする両者の論考については、東アジアのモンゴル族の仮面習俗の在り方から理解できる。現在のモンゴル族の仮面は、後世においてラマ教の伝播によって神像や仮面がもたらされたものであり、古来からの土着文化とは無縁のものであることが理解できることとなる。このような仮面習俗を世界的な面から仮面の追及をした大林太良氏も仮面は主として農耕に携わる民族のもととして位置付け論述している「人と仮面—仮面の儀礼的使用—(1998:小学館)」。また、大林氏は論考の中で、採集狩猟民でありながらも世界的な視点から北太平洋地域の仮面仮装文化は非常に珍しい文化であると、前述した縄文時代の東日本文化を定住性の高い安定した民族の特性とみて提起している。

これら研究者の仮面と生業の関わりについての論考をまとめると『仮面』は、民俗学的な視点では、本来農民のものであり、狩猟民族では北太平洋沿岸の民族だけが例外的に『仮面』を有し、遊牧民族は『仮面』をもたないという結論になる。

では例外とされた北太平洋沿岸の民族、なかでも国内の仮面文化はどのような派生をとげて現在に伝承されてきたのであろうか。

すでに記したように国内での仮面の派生は、考古遺物として発見されている貝殻を使用した貝製仮面(熊本県阿高貝塚)があり、縄文時代中期末(約4000年前)の年代観を与えられている。この貝製仮面はイタボガキの殻に目、二孔と口、一孔の計三孔をあけた簡単なものであるが、この時代において既に仮面の派生を窺い知ることができる事例でもある。その後、貝製仮面は後期中葉頃まで続くが、後期前半頃から土製の仮面及び獣皮や樹皮製の仮面に取り付けた部品と考えられている鼻や口、耳をかたどった土製品(岩手県八天・葦内・立石遺跡)が東北地方を中心に発見される。さらに縄文時代中期以降の年代観を有す土偶の中に仮面を着けたと考えられている考古資料がある。ひとつは顔面全体を覆い隠す程の大きな仮面を着けた青森県亀ヶ岡遺跡から発見された資料であり、もうひとつは頭部から顔面全体にかけて遺存している大型土偶である。岩手県葦内遺跡からの発見事例であり、この土偶の口や鼻・耳が各部位にあたる部品を取り付けているように観察されることから、この時代における仮面は皮革や樹木及び樹皮で作られ、口や鼻・耳などの土製部位を、本面に後に取り付けするというような仮面であったと推察されている。

また、この時代の仮面の遺存数が極端に少ない理由として、本面の材質が樹皮や皮革並びに樹木であったために、長年の埋設状況の中で土製の各部位だけが残り、樹皮や皮革部分の面は埋設する土性環境によって腐敗し消滅するに至ったものと意味づけしている。

いずれにしろ縄文時代中期以降には、国内における『仮面』の存在が考古資料の実例から明白であり、仮面文化が狩猟採集民のあいだで派生したものであることが窺い知れるとともに、後世における食料生産社会に受け継がれていった可能性を考える次第である。

では、国内における食料生産社会での『仮面』の存在は実例として発見されているのであろうか。縄文時代に次ぐ弥生時代における『仮面』の実例は、現在まで発見されていないが、縄文時代の系譜を想定させる男女一対とみられる土偶形容器が山梨県岡から発見されている(設楽博巳「土偶形容器と鰐面付き土器の製作技術に関する覚書」1999)。この資料は前二世紀頃の年代観を与えられているもので、顔面には円形の仮面を被ったような形で表現され、乳幼児の遺骨を収納するための蔵骨器とされる。さらに甕型土器などの器表面に線刻の沈線を描かれた線刻紋土器が発見され、その報告例がある。土偶形の蔵骨器は、縄文時代に派生し、精神的な儀礼に多用された土偶の系譜を強く引くものであり、死から派生する悪霊や現世での病魔退散、さらには再生を意識した出産などを念じた“穢れ”に対する儀式が時代を越えて踏襲された結果と観ることができ。

しかし、この土偶形蔵骨器は、前一世紀頃には甕棺といわれる壺形の土器へと変化し、一般化されることになる。それには、これまで観られた人間的姿態としての造形物への刺青様式の人間的な形態ではなく、甕棺土器の器表面に鳥や鹿・人を形象化して線刻で描いた絵姿としての表現作風をとるものである。これら線刻絵は、死者を埋納する甕棺ばかりでなく、祭礼用の壺形土器や甕形土器にも施されていることからすれば、前代での精神的範疇を越えた複雑な精神儀礼に多用されていたことが推察し得ることになる。いわゆる食料採集社会から食料生産社会への移行とともに、定住という生活形態が生み出した精神儀礼に伴う発展形態の多様化が弥生時代の民衆心理に芽生えたことを示す結果であろう。

農耕という定住生産社会に移行したこの時代での「鳥」は、天空を飛び回り太陽の恵みをもたらすことから稲の象徴とされ、「鹿」は山野を駆け回ることから土地や樹木の象徴として信仰された。また、「人」は精霊を宿す人間的姿態を備えた依代、いわゆる巫女の呪術者であり、精霊や祖礼の依代として土器の器表面に描き、呪術的儀礼によってそのものに精霊が降臨して

宿り、形代となって災厄から民衆を守ることになるのである。いいかえれば、これら線刻の土器は、民衆の精神的な思想体系のもとで、祭礼などに使用される「精霊」や「祖霊」そのものの姿なのである。縄文時代から弥生時代への移行は、食料採集社会から食料生産社会への変化ばかりではなく、狩猟採集民族から農耕生産民族への転化と祭祀儀礼の主体となる具象化した造形的依代から線刻の形代へと変化を遂げる時代でもあるが、民衆の内に秘める精神心理は受け継がれ、むしろ前代よりも信仰とする対象が拡大し、多様化された精神性が窺える。

この精神性は次の時代にも受け継がれるが、仮面の存在を明確に意味づける資料は少ない。

何故なら王権制度の確立に伴い、民衆お王権国家の関係が、統治する側とされる側に、明確に区分された地位の関係が成立した時代であるため、巫女的性格を有す呪術者が、国政を司る呪術者として民衆側から王権側に吸収されたためである。いわゆるこの時代は、民衆側のもので確定される仮面的な資料は皆無であり、王権側の精神的儀礼の仮面として推定される資料にとどまる。これらは、王権墓や豪族墓とされる古墳から発見された副葬品や埴輪群に観ることができる。類例として茶臼山古墳の碧玉製品がある。布製若しくは革製の仮面の目にあたる生命力を有す玉の霊威でもって死者と魂とを永遠なものにするという精神性に満ちたものである。また埴輪群には鳥類や動物、道具類、家型などのほか、人物埴輪があり、鹿の角や鳥を模した帽子を被る男現や巫女、農民、武人など多種多様な埴輪が立てられ祀られている。

特にこの人物埴輪には、顔の一部や全部の赤色のベンガラでもって塗彩した例が数多くみられる。塗彩は顔に塗るということで、全く別の人格的存在になることを意味しており、一種の変相であることからすれば、仮面としての延長線上にあることは間違いない。埴輪を墓域に配する行為は、死後の世界においても生前と同様に君臨することを願った精神性の祭祀表現であり、その際に塗られる赤色の彩色は、祭儀儀礼の際に必要な祖霊神や先祖神とう神や御霊を迎えるための交霊という超越的な霊験力を得て、託宣者としての依代になるための塗彩であり、一種の仮面的な役割を有したものであろうことが考えられる。やはりこの時代においても仮面の精神的特性は、呪術的儀礼に携わる者たちが、祭祀儀礼の際に祖霊神や先祖神の依代若しくは形代として霊験力を有する特殊能力者で、霊威的空間と現空間との狭間で活動するための人格変換的特性を有したものであったことが窺い知れる。

このような精神性を有していた時代、いわゆる7世紀頃に歌舞や演劇的な要素を多分に秘めた「具歌舞」といわれる仮面劇、「伎楽」が伝えられ、我々が良く知るところの仮面がもたらされる。鎌倉時代に記された伯近眞のおう『教訓抄』によれば、その年代は推古天皇20年(612)の時代に百済国の味摩之が具で伎楽を学び伝えたものと記されているが、一説では百済の扶余から仏教が伝来した宣化1年(538)頃には、何らかの形で伝来していたのではないかとする論説もある。この伎楽は、奈良期かあら平安初期にかけて天皇の国事行為にあたる鎮護国家芸能として仏教寺院などで盛んに執り行われていたもので、752年の東大寺大仏開眼供養などでも、演じられ、寺院の法会とも深く結びついていた。これらの仮面は現在、法隆寺や東大寺、正倉院。西大寺、広隆寺、福岡観音寺などに残されており、これらを総合的に分類すると、一組14種23面から成るとされる。用途は野村万之丞によれば、祝典・式典・祭典の三つの使用形態に区分され得るとしている。しかし、この伎楽という仮面芸能は、伎楽面の伝来から幾分分れて伝えられた「舞楽」にその地位を明け渡すことになる。この舞楽の面もまた、歌舞や演劇的な仮面に属し、寺院、神社、宮廷などで演じられる際の仮面であるが、伎楽面より歌舞性が強く仮面芸能としての象徴性が強い性格を有すものといわれている。

また、舞楽の定着は、9～10世紀頃にかけて唐楽や高麗楽など8世紀頃に伝播した諸外国からの楽舞を日本に整理統合して完成したものとされ、それらに使用される舞楽面の完成期も同

様の年代観が考えられる。これは日本固有の仮面文化の確立期としても推察できる年代観である。これ以降、舞楽は宮廷儀式のほか、社寺での祭礼や法会にも使用されることになり普及する。現在に伝わる舞楽面は、北は青森から南は宮崎まで、七十数箇所、500点を超える仮面が残されている。これら仮面群は、さらに密教の派生と共に山岳信仰を主体とする神道と仏教の融合形態から派生した独自の宗教行事などにも使用されることになり多様化し発展していく。また、民衆への仮面普及を述べるうえで、山伏修験僧の存在と活動も避けて通れない事象のひとつである。仮面の本源であった原始呪術的な災厄儀礼や露払い儀礼、追儺儀礼など、魔除けの神事儀礼として信仰されることになる。これらの原姿は森羅万象の精霊や祖霊神・祖先神であったりする。いわゆる民衆の祈りの根源であった精神性の復活である。

これらの精神性は、やがて「能」や「狂言」の母胎である猿楽や田楽の仮面の中に取り込まれ、翁舞の仮面にみられるような五穀豊穰や不老長寿、天下泰平など、人間生活の根底にある願望を象徴する精神性の高い仮面芸能として充実していく。中世末期に至って能や狂言は猿楽や田楽から分れ大成することになり、世界的にも類をみない多種多様な仮面をつくり出して現在に継がれている。これら能と狂言の仮面は、さらに山伏修験僧などによって地方にもたらされ、土俗的な地域芸能の仮面に影響を与えたほか、民間に信仰される原始的で呪術的な民間神事儀礼に使用される仮面にも少なからず影響が窺い知れる。近世の神楽芸能面などは、この能面や狂言面を基に形づくられた土俗的な仮面であるが、そこには民衆の強い精神性と祈念願望の念が込められていることは、疑う余地もない。

大林氏の論考の中で述べられた、例外的な仮面文化圏としての北太平洋地域、特に国内における仮面文化の広がり、前述のような時々の時勢に即応した形で形成されながら現代に継がれてきているのである。食料採集民時代から食料生産民時代へ、そして産業社会民時代への移行と共に、祭祀の形態も民衆独自の祭祀から統治者側の祭祀形態へと変化し、その後、伎楽や舞楽の伝播によって仮面芸能が発達し、祭祀形態も楽舞による儀礼や儀式形態に移行する。この仮面芸能的儀礼の発展は、結果的に民衆仮面芸能としての猿楽や田楽の成立を促進し、能や狂言の成立を確たるものとし、並行して精練された世界的にも類をみない仮面をかたちづくり、修験僧侶による民衆への特殊な宗教的儀礼に組み込まれることによって、民衆にもたらされ、個々や集団社会での民間儀礼に取り込まれ定着し、独特な仮面文化を形成しているのである。背景には生と死、豊と凶、繁栄と衰亡、除災と災厄などに対する畏怖と畏敬の精神性、さらには怨霊や亡霊、悪魔や病魔などに対する穢れへの精神性など、時代を超えた民衆の一貫した強い精神性と祈念願望の念が背景に秘められ育まれた結果なのである。

いわゆる国内における仮面は、四方を海で囲まれた立地的自然環境の中で営まれた、狩猟民族から農耕民族への移行を通して、一貫した民衆の精神性のもとで形成された文化であり、人間を超えた霊的存在、すなわち精霊や死者の霊、心霊等を表現するものと、自然界から人間の世界へと介入し媒介する動物霊を表現するもの、さらには仏神の依代や形代として演劇や芸能、儀式儀礼などに媒介し表現されるものなど三様で占められよう。そしていずれの仮面もが、日常世界からは不可視の世界や他世界な霊的世界、人の住居領域と次元を異にする自然界や死者の世界などから現空間へと出現することで、両者を媒介し、不可視のものを見える姿で表現するために多用される神話的宇宙論的次元を有した意味深く重要な装置ということになるのではなからうか。そこには、必然的に祭儀儀礼や祭りが催されるのである。

希薄化した現代の指針社会の中においても、まだまだ根強く催され続けている各地区での仮面祭儀儀礼や仮面芸能、国内のひとつの特色ある精神伝統文化としてみつめ、継承していつてほしいものである。

文責：鈴木 明美

鬼の里だより

●企画展・特別展

<特別展> 「親子で楽しむ仮面の世界」
9月23日(金)～11月26日(土) 3,277人

<特別展> 「よろず伝承展～鬼と節供人形～」
12月17日(土)～3月11日(日) 3,031人

●鬼の館芸能公演

10月10日 黒岩鬼剣舞 観客 201人

10月24日 口内鬼剣舞 観客 109人

●鬼学講座

第1回 仮面の原像 講師:鈴木明美氏
11月3日(木) 受講者 26人

第2回 仮面の考古学 講師:相原康二氏
11月20日(日) 受講者 23人

第3回 能面の発達と種類 講師:菅原夢玄氏
12月18日(日) 受講者 26人

第4回 仮面芸能 鬼剣舞 講師:熊谷 保氏
1月22日(日) 受講者 24人

第5回 儀礼習俗と仮面 講師:斎藤壽胤氏
2月12日(日) 受講者 27人

●福豆鬼節分会

2月5日(日) 入場者 1801人

●鬼っこわんぱく講座

鬼剣舞体験
1月8日(日)・14日(土)・15日(日)・22日(日)
29日(日)・2月4日(土)・5日(日)全7回講座
参加者 18人

●鬼ッズ・プレイミュージアム 10月1日～3月31日

和紙面づくり 参加者 22人
出前講座件5件 参加者 74人
ワークショップ

・親子で楽しむ仮面作り
10月15日(土)・11月5日(土) 参加者 39人

・LED妖怪ランプづくり
12月25日(日)・1月5日(木)・9日(月)
参加者 51人

・鬼(キ)ッズチェアづくり
1月7日(土)・15日(日) 参加者 30人

・はりこのお面づくり
1月13日(金) 参加者 8人

利用案内

開館時間 午前9時から午後5時まで。
なお、入館は午後4時30分まで。

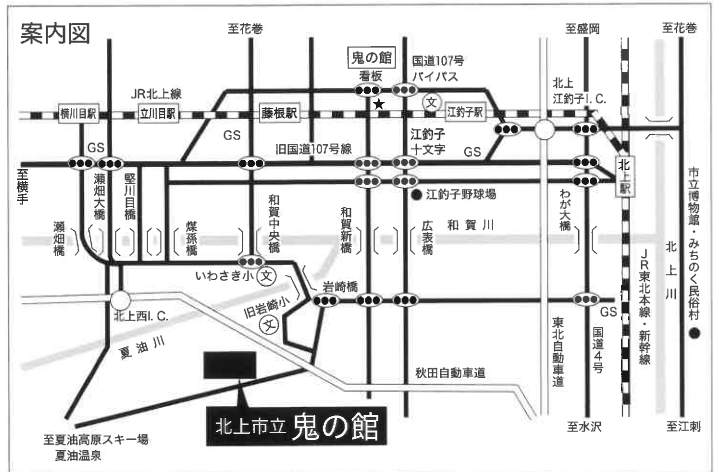
- 休館日
- ・12月～3月の月曜日
 - ・12月～3月の国民の祝日の翌日
(土・日・月曜日の場合は火曜日)
 - ・館内整理日(11月27日～11月30日)
 - ・年末年始(12月28日～1月4日)

入館料	一般	500円(400円)
	高校生	240円(180円)
	小中学生	170円(120円)

()内は20人以上の団体料金。
下記の場合、市内小中学生は入館料が免除になります。

- ・学習活動で申請利用する場合

- 交通案内
- ・JR北上駅西口よりバスで25分。
煤孫経由横川目行、瀬美温泉行「岩崎橋」下車
徒歩10分。
 - ・JR北上駅より車で20分。
 - ・東北自動車道「北上江釣子I.C.」、秋田自動車道「北上西I.C.」よりともに車で15分。



北上市立鬼の館だより

第36号 2012.3.31

編集・発行 北上市立鬼の館

〒024-0321 北上市和賀町岩崎16地割131番地
TEL 0197(73)8488 FAX 0197(73)8508